

温泉場のポリティクス —末広鉄腸『政治小説 雪中梅』と箱根—

安藤 史帆

要旨

自由民権期に登場する小説群（「政治小説」）の代表作とされる末広鉄腸『政治小説 雪中梅』は、登場人物の自我や内面を描かず、作者の政治的理念や思想の提示に執着するものと解釈されてきた。また、自由民権運動の挫折と『小説神髓』の登場によって、「政治」から離れ「風俗」を取り込んで、世態人情化するさまが指摘されてきた。本稿では、温泉場（箱根）の空間性に着目して『雪中梅』を読み直し、従来の政治小説研究のなかで見逃されてきた政治的諸相を導出して、「政治小説」の読みの可能性を広げたい。まず、同時代の箱根湯本の「福住楼」の固有性や、自由民権後退期の政治的事件と関わり合う箱根の舞台性が、国野と春、自由民権志士の出会いを可能にしていることを導出する。また、温泉場の風呂場の改稿の検討を通して、同時代の新たな政治的気運を召喚する箱根という温泉場が、政治的側面を解体する場へと変容することを解き明かす。『雪中梅』の政治的可能性のみならず、それが見失われる過程を炙り出すことを通して、これまでの「政治小説」に付与された解釈を刷新しうる契機を読み解く。

キーワード：政治小説，箱根，自由民権運動，温泉場，内面

1. はじめに

末広鉄腸『政治小説 雪中梅』（以後『雪中梅』と略記する）は、自由民権運動後退期の1886（明治19）年に博文堂から刊行（上篇8月、下篇11月）された作品である。国会開設150年に発見された国政の功労者国野基（くにのもと）の伝記として語られる本作は、次のように展開する。

国野は、正義党という架空の政党に所属する自由民権の志士である。神田に下宿し、翻訳等の原稿料で生計を立てながら民権運動家として活動していた。ところが、国野が同志の武田宛の手紙のなかで、英書名を「ダイナマイト」と書き誤ったため、国野は武田と共に国事犯の嫌疑をかけられ、拘引入牢されてしまう。なんとか国事犯の嫌疑が晴れた国野は、牢獄生活で疲弊した身体を癒すため箱根を訪れ、そこで富永春と初めて出会った。両親を亡くし叔父方に引き取られていた春は、箱根を訪れる以前、国野の演説

を聞きに行ったり、匿名で資金や手紙を送ったりして、国野を陰ながら支える立場にあった。ちょうど叔母の付き添いで箱根に訪れた折、国野の匿名の支持者だった春は、顔見知りとなって国野との距離を縮めていった。一方、国野は、春が帰京した後、箱根で偶然出会った自由民権の志士たちと政治的談義を交わしていた。その議論が巷で流布する春の噂話に逸れ、春のことが気がかりになり東京へ帰った国野は、春が以前国野を食客とし援助していた富永正左衛門の娘であることを知る。さらに、正左衛門が国野を春の婿に迎え、財産を相続させることを望む遺書が発見され、二人は晴れて結ばれた。

『雪中梅』は、これまで日本近代文学研究において、「明治政治小説家」鉄腸の代表作であり、かつ「政治小説の代表作」として位置づけられてきた¹。『雪中梅』が「政治小説」の「代表」と位置づけられた背景には、「政治小説」と自ら銘打って、発表と同時に忽ち人気を博し、「空前の大著述」²と讃えられたことがある。一方、その位置づけには、自我や内面の確立する以前の小説としての「政治小説」に対する批判的な評価も含みこまれている。自由民権期に登場する小説群（以後、「政治小説」とする）は、作者の政治理念や思想を理解する媒体に過ぎず、前時代的な技法に依拠する「近代文学」成立以前のものとして解釈され、長らくの間、個別具体的な検討がなされずに来た³。『雪中梅』を含めた鉄腸の「政治小説」の諸作を、「戯作小説」の領域から出ないものと認識しながら、作者鉄腸の意気込みという面で、何らかの新生面を築いていたと主張する柳田泉の研究もこうした文学研究の動向に通ずるものだ。柳田は、『雪中梅』を「明治の新小説にそのまゝ適応出来るものでない」とする一方で、「政治的空気」を包み「政治小説たらしめた」ことを評価する。しかし、柳田によって「現実性をもつ」とされる「政治的空気」は、漠然とした当時の政治運動、警察署や監獄などの当局の動きとして示されるだけだ。結局、鉄腸の「建設的理想」を掲げるためのものにすぎず、鉄腸の政治思想によって形作られた「大円団」として『雪中梅』は位置づけられた⁴。

作者の政治思想に照応させた柳田に対し、前田愛は「政治小説」の個々の作品の内部を具体的に検討するなかで、世態人情化する『雪中梅』を自由民権特有の政治的な可能性をなし崩しにして、皮相的で世俗的な人間像を留めたものと位置づけた。前田は、頼山陽『日本外史』の開示した「歴史像」を規範とする「政治小説」が、自由民権運動の失敗を契機に、立身出世志向へと「旋回する」さまを指摘した⁵。前田によれば、東海散士『佳人之奇遇』（1885-1897（明治18-30）年）、矢野龍溪『経国美談』（1883-1884（明治16-17）年）、宮崎夢柳『虚無党実伝記 鬼啾々』（1884-1885（明治17-18）年）などの「政治小説」は、幕末維新の「歴史」あるいは自由民権運動の「歴史的時間」を問い直す作者の「実感」や「歴史意識」を留めており、「新しい歴史文学の可能性を切りひらこうとした意欲的な試み」である。一方で、坪内逍遙の諸作同様に人情世態化する『雪中梅』などの作品は、「欧化主義を背景に前面に登場する「紳士」型の」頹落した人間像、「紳士」社会の「俗物性」を映し出すものとされる⁶。

しかし、『雪中梅』は、柳田のいうように作者の政治思想という「政治」だけを留めているものなのだろうか。あるいは、前田によって「歴史」が内包されないものとされる『雪中梅』などの世態人情的な「政治小説」は、政治的可能性が閉じられたものなのだろうか。西田谷が指摘するように、『雪中梅』を契機に「政治小説」が「政治現象の写實的表象を伴う人情世態小説」⁷として出発していたとすれば、皮相的で俗物的だとされ見逃されてきた世態人情的な側面にこそ、政治性が備えられているのではないか。「政治小説」のうちに、作者の政治思想や志向あるいは前田のいうような「歴史」に留まらない同時代特有の雰囲気や政治的要素が、内包されていることを読み解かねばならない。

そのための一助として本稿では、『雪中梅』の世態人情的展開の発端ともなる才子国野と佳人春が会おう温泉場に注目する。徳富蘇峰は同時代において、「堂々」と「政治小説」の「名目」を「附」す『雪中梅』の、「貧寒書生」（国野）が「温泉場」で「貴嬢」（春）と「相見」ることをきっかけに財産を得て、国家の功労者に出世するという世俗的な展開を批判的に取り上げていた⁸。柳田も、蘇峰同様、佳人春と偶然に出会う温泉場の展開を通俗的で「不自然を免れない」と批判している⁹。しかし、『雪中梅』の温泉場は、こうした通俗的な要素ばかりでなく、同時代の政治的要素を内包する場として見出すことができる。温泉場は、財ある「貴嬢」すなわち佳人との出会いばかりでなく、自由民権の同志との出会いの場でもある。温泉場への訪問以前、検閲によって投獄されているように、友との交際は監視下に置かれ、浅草井生村楼という集会所で演説を行うなど、国野の政治的活動は限定された場でのみ許されてきた。それに対し、温泉場では他県の同志と交流することが可能となり、そこでの談義を通して国野の政治的理念は実体化する。温泉場という舞台を通して、作者の理想理念の提示に留まらず、出会い語り合う展開と、自由民権後退期の政治的動向の接続が看取されるのだ。

また、箱根という固有名が与えられた温泉場に注目すると、同時代の政治的な実空間が浮かび上がってくる。箱根については、柳田が「鉄腸が幾度も遊んで熟知している土地であるだけに、この箱根の風景乃至浴場の描写だけは、皮相的だが実感が出ている」¹⁰という評価を下し、糖尿病湯治や執筆の際に定宿¹¹としていた「福住楼」への恩恵を見ている。これに従えば、「福住楼」は、作者ゆかりの、なおかつ読者と共有できる由緒ある温泉宿となり、箱根の温泉場という舞台設定もまた「俗物性」を補強するものでしかないだろう。しかし、作者と密接に関わる固有の宿あるいは温泉場としてではなく、同時代の政治的事象との関わりのうちに、箱根という固有の温泉場を読み解く必要がある。そうすることで、これまでの解釈に留まらない『雪中梅』の政治性を解きほぐし、「政治小説」の在り様を提示することができるはずだ。

本稿では、作者の経験に結びつく皮相的で通俗的なものとしてではなく、物語の政治的展開を支えるものとして、上篇第七回から下篇第三回にわたる『雪中梅』の箱根の

温泉場に注目する。自由民権後退期という同時代を表出する『雪中梅』の温泉場の政治的空間性と共に「政治小説」としての可能性を明らかにしたうえで、その政治性が解体する過程を検討し直し、「政治小説」の在り様を再び捉え直す契機を見出したい¹²。

2. 才子佳人の出会いと温泉場

本節では、箱根の政治的空間性に迫るために、箱根のなかでも、国野と春すなわち才子佳人の出会いの場となる「福住楼」について検討する。まず、国野と春、各々の身上を確認して、彼らが箱根の外で出会えなかった理由を明らかにしておきたい。国野は、浅草井生村楼の演説によって、あるいは新聞紙上において、世間に名の知れる自由民権運動の志士であるが、「田舎」と称される地方出の青年である。彼は春の父の屋敷に食客として居候した後、家賃を滞納して神田の安下宿で暮らしているように、志ありながら貧乏生活を送っている。

一方で春は、「築地三丁目」又は「一丁目」にある叔父の屋敷に住まい、築地にある「英語女学校」（ミッションスクール）に通う。その亡き父富永正左衛門は金禄公債証書を所持しているため、彼女は特権的な身分を保証される華族又は士族と考えられる。幕末から明治三十年代前半までの築地居留地の史料を纏めた『都市紀要』によれば、春が住んでいる築地は、開市場及び居留地の近郊にある。築地は、条約締結国の外国人の居住や通商のための専用特別区である居留地であり、公使館やミッションスクール、教会が創られ、外国人の布教や商売の拠点となったことで、独特の雰囲気を形成していた¹³。商業、文化、教育の面で恩恵を得た人々で賑わいを見せた場の近辺に住いを持ち、教育を受ける春の立場は、明らかに国野と対照的である。東京の市街は、旧幕府側の幕臣などの構成者が政府により追い出され、その跡地には、屋敷を接収した維新側大名、新興資本家等の中流上流の人々が集まった。身分制度は撤廃されながら、都市は、身上、資産、階級によって居住区域が分けられ、新たに上層と下層が分断される空間となっていた。生活空間が分離されるのに加え、活動の場も限られている都市のなかでは、国野と春がお互いに知り合い、交流することは容易ではなかったのだ。

それでは、都市の日常において隔てられた状況にある国野と春が、どうして温泉場で出会うことができたのであろうか。これには、単なる日常から非日常の転換というばかりでなく、箱根湯本にある「福住楼」の固有性が関与している。温泉場の場面は、高くそびえる山々を前にした「世に名高き箱根湯本の福住楼」の「夕風涼しき川べり」の一室で、国野が春の客室から流れる琴の音色に誘われる上篇第七回から始まる。琴の音色を聞いた国野は、「風呂場の上口」で拾った「御詠歌」の主であると予測して、下女に春との面会を取り持ってもらった。宿の一室において、隣室の音が漏れ聞こえるという非日常的体験が、春へと近づけていることは言うまでもないが、この二人の邂逅は、箱根湯本の「福住楼」という固有名のもと、ある条件が重なって成立していることに注

意せねばならない。その条件とは、客室以外に、他の旅客と共有して使う空間（内湯としての「風呂場」）が存在し、下層の者と上層の者とが共有できる宿であるということである。

都市から離れた地方の旅宿であれば、旅客同士が接近するのはどこでも可能でありそうだが、東京という大都市と結びついて発展した箱根において、下層上層の旅客が一宿において接近するのは容易なことではなかった。橋爪貫一編『箱根熱海温泉道案内』（1877（明治 10）年）という当時の温泉案内では、任意の基準ではあるものの施設の設備、充実度、歴史性と知名度から、箱根の宿が第一等から第七等まで格付けされている¹⁴。様々な身分を第一等から第七等までの宿に振り分けることで階層構造がつくり出された箱根の温泉場には、東京という都市の身分差を顕在化させるシステムが波及していた。

しかしながら、このような階層構造のなかで、湯本にある「福住楼」は、独自の運営方針によって、下層の者と上層の者とが混在する空間となっていた。橋爪の案内書によれば、「福住楼」は、ランク一等であるが、当主福住正兄は、「正直」、「安値」、「貴賤の差別をしない」商売をアピールし、知識人、政治関係者を歓迎する姿勢をとった宿だった¹⁵。『雪中梅』では、「福住楼」以外に二つの宿が登場するが、それぞれに「福住楼」と差異化され、映し出されている。「福住楼」と同じく第一等の「亀屋」は、「福住楼」を出た春の次なる宿泊場所であった。国野は春の後を追いかけたが、その道中で遭遇した同志に、「亀屋」のような「上等客」向けの宿屋は、国野のような「銭のない男」には難しいと揶揄われ、案の定「亀屋」で二人の再会が果たされることはなかった。他方で、第五等の「梅屋」は、民権の志士あるいは書生の宿となっている。このように箱根の階層構造のなかで差異化されながら、「福住楼」は、第一等でも身分的制約の少ない宿として才子佳人の出会いの場を提供していたのだ。また、箱根湯本に位置する「福住楼」は、明治初年早くも、各宿に内湯を備えていた温泉宿の一つであった。温泉地では、宿内に浴場（内湯）を設けず、湯畑の浴場へと出かける外湯の習慣が定着していた当時、内湯は一般的なものではなかった¹⁶。「福住楼」は、宿の外ではなく、内に風呂場という宿泊者同士の共有空間を持ちえた場だったのだ。

さらに、こうした箱根湯本の「福住楼」という場を介することで、才子国野にとって偶然なる出会いの契機が与えられるだけでなく、佳人春にとって絶好の機会が生み出される。

貴君の此へ御出のことは承知して居りました（中略）私しはご挨拶を致したことは御座いませんが御名前とお顔は能く存じて居ります（中略）蔭ながらお気遣申しましたがマア宜しい御都合で御座いました（初版：上篇第七回）

ここに至るまで、国野の演説の聴衆の会話（上篇第二回）あるいは同志の須田の目撃情報（上篇第三回）から、「つづけて」国野の演説を聞きに来る「別嬪」の存在が示唆されてきた。春は、「金子三十円」と共に「無名氏」として送った手紙のなかで、「他日青天白日に談話するの時あるべきなり」（上篇第四回）とするように、国野の政治的「素志」に惹かれ語り合う機会を得たいと考えているが、都市の内では「無名」の存在としてしか接近できず不可能だった。しかし、内湯を備えた「福住楼」は、そうした春の状況を解放する。都市では「無名」の行動しか許されない春は、国野と「福住楼」の宿を同じくしたことを知って、好まず「中絶」していた琴を弾き、「御詠歌」の筆跡を残すというような行動を起こし、相対して「談話する」時機を得る。国野にとって偶然なる出会いを齎す「福住楼」は、春にとっては行動の制限が緩和され、自身の望みを叶えるのに好「都合」の場だったのだ。

これまで才子佳人の物語の佳人は、才子に財を与え、助力する程度の立場と見做され、「才子」の立身出世が非難されるなかで見落とされてきた。しかし、温泉場の条件に注目したとき、そこにはこれまで見捨てられてきた「佳人」の側の出会いの在り様が浮かび上がってくる。春は、温泉場で無名性から解放され、国野を介して間接的に政治への関与をも実現させる存在となる。すなわち都市で埋もれてしまった女性の政治関与の可能性が、箱根という温泉場で開かれているのだ。『雪中梅』は女性が政治に関与するという着想を持っており、偶然にも運命的な出会いを果たす才子の物語というだけではなく、佳人の物語としての「政治小説」の姿を映し出している。「貴嬢と相見」る通俗的な現場であり、作者の経験と世間の評判に裏打ちされた皮相的な場とされてきたが、実は箱根湯本、「福住楼」という場は、都市では分断される下層と上層とのコミュニケーションあるいは男女の交流が可能となる政治的な空間として機能していたのである。

3. 自由民権の志士たちの出会いと箱根

また、『雪中梅』において、箱根という温泉場は、佳人との出会いが齎される「福住楼」という政治的な空間を持つだけではない。本節では、下篇第一回、第二回の場に注目し、自由民権の志士たちを集める場としての箱根の空間性について検討する。

国野は箱根の道中で春と別れた後、武田という同志と遭遇する。国野と共に爆発物製造の嫌疑をかけられ拘留された同志武田は、釈放後、実家のある伊勢に帰省していた。彼は伊勢から帰京する際、国野が箱根湯治に訪れていると聞いて、東海道から箱根に入り、国野を探し歩いていた。国野と武田は底倉の「梅屋」に宿泊するが、そこで地方の自由民権運動の志士田村一行と遭遇する。先に示した橋爪の案内書においてランクが五等であった底倉の「梅屋」は、「福住楼」とは打って変わって、春より身分的に下位に置かれる自由民権の志士たちが集う場となっている。

先年自由党の盛んな時分に東京で交際をしましたが四五年振に図らず此の楼に落合つて御一緒になつたのです（初版：下篇第二回）

国野は、東京での「交際」が禁止されて以来しばらく会っていなかった田村と「四方山話」をはじめ、その後、四者の議論は地方政治と国政における問題に及んだ。柳田は、下篇第二回は、朝野新聞に掲載される「何ゾ議会ヲ刺衝スルモノナキヤ」という鉄腸の同趣意の演説を反復し、「鉄腸の政治的イデオロギー」を示す場だとしている¹⁷。しかし、ここで注目したいのは、その談義を可能とする温泉とりわけ箱根という舞台である。温泉という場では、作者の政治理念と重なり合うような一方向の演説ではなく、双方向の議論が展開されている。ここで、国野は地方同志から地方の政治状況を聞かされた。この場が都市から離れた温泉場に設定されたことで、集会条例などの一連の取締りによって、集会結社が禁止されるなか、都市では語り合えない同志との談義が実現され、国野は地方の実状を知ることができたのだ。

とりわけ箱根は、当時、自由民権運動と関わり合う次の二点の条件を備えている温泉場だった。第一に、箱根が横浜を介して自由民権の拠点ともなる絹の道と結びうる地域であったこと。幕末最大の輸出品目である生糸の産地は群馬や埼玉の山間地帯、もしくは山梨、長野であった。八王子に外国人が買い付けに来るようになり、横浜から八王子にかけて、いわゆる絹の道が整備されていく。絹の道沿いの地域は早くから、外国人の持ち込んだキリスト教や自由民権の思想に触れ、自由民権運動の一つの拠点となっていた¹⁸。一方、外国人の箱根の保養旅行が許可され、横浜から箱根に向かう道路もいち早く整備されていた¹⁹。絹の道沿道も、箱根周辺も、横浜居留地の外国人が自由に遊歩することが可能な地域だった。すなわち横浜を拠点に居留地の外国人は絹の道を辿り生糸を買い付けに行った一方で、保養のために箱根に足を運んでいたのだ。横浜を介して自由民権運動の拠点へと道が開かれていたことで、箱根は自由民権の志士を集める可能性を秘めていたといえる。第二に、自由民権後退期の箱根が、横浜と結びついて早くから中央都市の文化圏に組み込まれながらも、鉄道が十分に整備されず、自由な気風と自立性を保つ場であったこと。『雪中梅』の箱根は、「人家」や「湯楼」の狭間に、「行歩の艱」を忘れさせる「幽邃」な「風景」を備える²⁰。発表当時、箱根の鉄道敷設及び、幹線道路の整備は構想段階にあった²¹。日本全国を鉄道交通網が覆って行く時期、鉄道が中央文化を輸出することで、地域が変容することが危惧されるなか²²、『雪中梅』は、そうした時代へ移行する以前にある自由民権後退期の政治的な雰囲気を取り込んでいた。

さらに、このような条件を備える箱根が、作者によって象徴的な意味づけをされ、自由民権の志士たちが集う場として設定された可能性も浮上する。幕府滅亡と共に、往來の自由が認められ、箱根の関所は撤廃された。下篇第二回の「梅屋」で、「伊勢」から「東海道ぶら／＼遣て来て」、「箱根宿から蘆湯」、「木賀宮下堂島」を渡り歩いたと語

っているように、武田は芦野湖畔にあった箱根関所を乗り越し、自由に往き来する。箱根を介して、伊勢参りなど特別な理由のみ往来を許された旧来の規制が解体され、新たな秩序のなかで自由に移動する自由民権の志士の姿が映し出されている。関所があった箱根は、幕府政権が解体した後に生み出された新たな自由の様相を浮かび上がらせているのだ。

また他方で、自由民権の志士が箱根へ流れ込み集結するという展開において、箱根は同時代の政治的事件と関連付けられている。自由党解党後続いていた一連の事件、すなわち加波山、秩父、飯田、名古屋、大阪、静岡事件といった激化事件のうち、前者三つは横浜から生糸が運ばれた絹の道と繋がる地で、残る三つは東海道上にある地を拠点としている。東海道や、絹の道へと密接に繋がる地としてある箱根は、事件と事件を結ぶ中継地あるいは本拠地のような場といえる。このような箱根と自由民権の繋がりを裏づける出来事としてあるのが、静岡事件である。静岡事件は、各地の激化事件と同時蜂起を目論み、1886（明治19）年7月10日に予定された箱根離宮落成式に集う政府高官の暗殺を企てたが、先に他の事件が各個鎮圧され、未然発覚によって関係者が検挙されることとなった事件である。計画実行場所が箱根離宮であるばかりでなく、1885（明治18）年の春に箱根山中で実地見聞と襲撃に使用する手製爆弾の試験が行われ、浅草井生村楼や神田の下宿が襲撃計画に利用されていた²³。『雪中梅』の自由民権志士が落ち合う箱根、国野の演説会場となる浅草井生村楼、自由民権の複数の同志が訪ねてくる神田の下宿、神田の下宿で起こる志士の検挙。これらは静岡事件に重なり合っている。

この事件は、検挙直後から新聞で報道され、世間の注目を浴びていた。地元の静岡大務新聞は、6月16日時点で「県下自由党の拘引」と題する社説を掲げ、国事犯の疑いを仄めかしている²⁴。こうした地方紙での報道はもちろんのこと、鉄腸が勤めていた朝野新聞を含む、東京横浜毎日新聞、東京日日新聞、読売新聞、朝日新聞等の中央の大小新聞各紙で、事件に関する逮捕は連日のように報じられていた²⁵。『雪中梅』上篇は、この事件の発覚と検挙（1886（明治19）年6月12日）から、話題の冷めない8月27日（7月27日著作権免許）に出され、下篇は予審開始（9月）後、裁判終結（12月17日）を前にした11月30日（10月27日著作権免許）に発刊されている。事件の関係者が公判廷において真の企図を陳述せず、裁判所側はこの事件の首謀者を国事犯ではなく強盗事件として処断したために、事件の真相は包み隠されていた²⁶。静岡事件は、未然に終わったとはいえ、箱根での爆発物使用計画は各紙に報道され、爆発物取締罰則制定後、再び爆発物と自由民権運動の関係を露見させる出来事となっていた。そうした箱根という舞台に繋がる話題の冷め切らない未解決の静岡事件の要素が、『雪中梅』には鏤められているのである。

これまで『雪中梅』の「ダイナマイト」を発端とした出来事は、鉄腸自身の拘留経験と知人の拘留経験を織り交ぜたものと示唆され²⁷、加波山事件（1884（明治17）年9

月)との連関が指摘されてきた²⁸。しかし、箱根での自由民権志士たちの結束を介してみたとき、『雪中梅』が、過ぎ去ったものとしてではなく、同時代の政治的事象に接続されるものとしてあったことがわかるのだ。世態人情化を象徴する才子が佳人と出会う場として注目されてきた温泉場には、同時代の政治状況に接続する空間が開かれている。そうした政治的空間としての温泉場を契機に、『雪中梅』は、才子が財ある佳人と出会い、地方志士との交流で地方の実情を知り、国政へと向かう物語を紡ぎ出す。人情世態的な立身出世の発端は、自由民権後退期の同時代の政治状況に接続する箱根という固有の温泉場に託されていたのだ。

『雪中梅』は、取締の対象とならずに集い談義できる空間を留め、読者の身近に起こった同時代事件と連動することで、集会や結社が自由ではない自由民権後退期の政治的な雰囲気や召喚していた。箱根という温泉場は、『雪中梅』が「政治小説」の「名目」を付するための政治的な根拠を留める空間なのである。

4. 風呂場の改稿と「政治小説」の変容

最後に、初版と1890(明治23)年嵩山堂版(以後、改版と記す)との比較を通して、『雪中梅』の温泉場に備えられる風呂場という空間の効果について考えたい。初版以後、『雪中梅』は何度か版を改め、そのたびに作者が誤字脱字の修正、体裁の調整を行ったが、改版への改稿の際、風呂場の場面にはそれ以上の変更が施されている。飛鳥井雅道は、「擬音」を使用した「文体」に注目して、初版の「よい意味での戯作」じみた「文体」が、鉄腸の「小説改良」意識によって、改稿において失われていくと指摘したが²⁹、風呂場の変化については触れていない。本節では、同志との対話や風呂場での盗み聞きを介して、国野の内的な動きが映し出される風呂場(下篇第三回)の改稿に注目し、温泉場の持つ政治的な空間性が、初版と改版の間でいかに変化するのかを検討する。それを通して、「政治小説」の位置づけを再び問い直したい。

改稿が施される下篇第三回の志士の談義の末尾について、まず初版から検討しよう。この場は、大小新聞³⁰上の話題が音読によって提示され、新聞という新メディアの状況を介して進行する。前田愛が指摘するように、新聞や政治小説は、精神的共同体内部の「触媒」として、「朗誦」を通じて、自由民権の昂揚を支えていた³¹。大新聞に掲載された演劇改良論をきっかけに談義は始まったが、政府批判を避けた大新聞の方向転換が非難された後、「真面目な事ばかりで面白」くない大新聞の話題から外れて、小新聞で騒がれる春のゴシップ記事の話題が取り上げられる。

田「先刻風呂場へ参つた時に、下座敷の客が話して居るのを聞きますれば、築地辺の女で(中略)先日箱根へ湯治に来て居るうちに、情夫を拵へ、東京へ帰つて後ちも何だか大騒動を起こしたことが新聞に出居たさうで御坐います(中略)ト

話すを聴て、国野ハ（中略）「真逆其の婦人でもありますまい（中略）如何も小新聞の内には、人を讒謗することを善い事の様に思つて居る記者があるにハ閉口サ。と口では云へど心中は濛々として恰も雲霧を生ぜしが如くなれば（初版：下篇第三回）

ここで取り上げられたのは、国野と交流した春の「品行」や素性を執拗に追い回し、「形跡もないこと」を「讒謗」する「小新聞」の記事だった。自由民権後退期、投書欄を活用した「小新聞」において、記者と読者、投書家は相互に置き換え可能な関係にあった³²。国野は、「信用ハ出来」ず普段読むことのない政治メディアの情報に触れ、自身の個人的な事柄が第三者に漏洩するという事態に直面した。さらに、この場において、国野は「ハット驚き」、「黙然として手を拱ね姑く思案の体」となって考え込んだ結果、田村に「今から出立ませう」と帰京を促す。以後、国野は、春を標的とした記事が繰り返し取り上げられるたびに、「不快」な感情を露にするようになる³³。下篇第三回の方は、大新聞を介した政治的議論が小新聞のゴシップへと墮落するという当時の政治メディアの状況に連動するばかりでなく、自由民権の志士である国野が春と再会を果たす内的動機を与える場であったのだ。

改版は、こうした温泉場と政治メディアの密接な結びつきを誇張するよりむしろ、風呂場という空間を直接的に描いて提出されている。改版で上記場面は次のように書き換えられる。

△「別嬪の上に学問も出来るが、ドウモ品行が悪うて（中略）先日も箱根へ湯治に来て居る内に、情夫を拵へて妙な騒動をやらかし（中略）東京へ帰つたが、此の節も色々もめて居るそうジヤ（中略）」△「ソレは何処の女か子。」□「ウン、築地辺とある計りで、町名は書いて無い（中略）国野は風呂の中にて、二人の話を聞き、心の中にて、「（中略）アノお春と云ふ娘のことでは無いかしらん（中略）何んだか気に掛かるから（中略）様子を聞き合して見たいものヂヤ。」と心はムヤムヤとして、闇に迷ふ心地がすれば、風呂場にある内にも気が急がるれば（改版：下篇第三回）

初版で田村を介して下座敷の客の「小新聞」の話題を間接的に聞いた場面は、改版では国野自身を風呂場に行かせ、四角と三角の二人の書生の話を盗み聞きさせることで成立させている。また、初版では「黙然」と「姑く思案」した国野の様子が描写されていたが、改版では、「イヤイヤ、人は見掛けに寄らん」と悩んだり、「若し」かしたら誰かが「構造したのであるまいか」と仮定したりする国野の「心の中」が描写される。改版では、田村が縮約して話した書生の会話内容を、その会話の場に国野を向かわせ、直に共

有させると同時に、より詳細に国野の「心の中」を描写するという変更が施されたといえる。

初版において見られた「小新聞」の間接的な役割は失われる一方で、改版の下篇第三回の場面では、書生の会話と国野の心の動きに紙幅が割かれている。ここには政治的メディアを生かした初版と、国野の内的な動きに焦点を当てる改版という差異が見出せる。湯気が立ち込める風呂場では、素性の知れない他者が自由に入退室する。互いの間を湯気という曖昧な壁で仕切られ、身を隠さずして顔（素性）を隠しながら、他人の話に聞き耳を立てるには絶好の場所として、温泉場の風呂場が描かれていたといえる。しかし、初版でその場は政治メディアを活用して間接的に利用される一方で、改版の方では、初版よりも国野の内的な動きが伴うようにして直接的に利用されているのだ。

内的動きが改版で注力されるのは、二葉亭四迷『浮雲』（1887-1889（明治 20-22）年）の影響が考えられる³⁴。国野の内的独白が挿入され、国野の「心」の内の「ムヤムヤ」や「闇に迷ふ心地」を描き、初版より外側から把持された内的な感触、心的動揺を描いた改版の手法は、『浮雲』の手法³⁵に重なり合うところがあるからだ。しかし、直に盗み聞きするとはいえず³⁶、それを発端に、登場人物の心の動きが示され、出来事が動機づけされているという点で改版は、坪内逍遙『妹と背鏡』（1886（明治 19）年 10 月）³⁷の手法に通じ合う。『妹と背鏡』のように内面描写の伴う盗み聞きが繰り返されているわけではないが³⁸、内的独白に依存して内面が描写されるという点で『雪中梅』改版には、表現の拙さが認められるのだ。そればかりか、温泉場の風呂場の空間を直接的に描き、内面描写を増やすことで、同時代の政治メディアの状況を映し出す温泉場の政治的效果は失われている。飛鳥井の指摘するように、改稿には確かに作者鉄腸の「文学改良意識」が絡み合っていたかもしれないが、「戯作」的な要素が「改良」し損ねる過程ばかりでなく、「改良意識」によって政治的な場としての性格が解体する過程が描き出されている。自由民権後退期の政治動向を映し出す温泉という空間は、当初は同時代の「政治小説」の政治的解釈の可能性を開くものとしてあったが、改稿によってその政治的な役割を失ってしまったのだ。

従来、文学研究においては、「政治小説」が政治的に挫折したことで、「政治小説」や「政治」に向けられたリビドーがその対象を失い、内に向かう文学が登場するという流れが示されてきた³⁹。近年、その過程を「文学が政治家としての活躍を願うような青年たちの情熱の対象として発見され、遊戯（戯作）の対極に置かれるべき真摯な思想的営為として変貌を遂げていく」展開として新たに見直す動向もある⁴⁰。しかし、『雪中梅』の異同分析を通して示されるのは、政治性が喪失する過程であり、それは、後者が示すような「政治小説」の政治性が内向する文学において引き継がれ「思想的営為」となりうる「文学」の展開とは質を異にしている。前者において指示された政治性を見失う「文学」の展開に今一度注目すべきことを改稿は示唆している。

先に見てきたように、箱根という温泉場は、政治的コネクションを形成し、自由民権の志士が国の功労者として成り上がる物語を動かす重要な役割を果たしていた。しかし、『雪中梅』の風呂場の場面の改稿に注目するとき、そのアプローチによって同時代の政治的状況を反映する効果が失われてしまったことがわかる。改稿は、従来指摘されてきたように作者が「戯作」的な「文学」を「改良」しようとして失敗した過程ばかりでなく、当初留められた政治的要素が解体され見失われる過程を示すものだ。当初『雪中梅』は、箱根を舞台とすることで、世態人情的な安直な筋立てのうちにも、自由民権後退期の政治的諸相を映し出すことができた。しかし、改稿を通して、当初の政治的態度を変更し、喪失する過程を歩んでしまったのである。「政治小説」は、政治的可能性を留めているか否かで二分されるべきものではなく、政治的可能性と共にいかなる限界を留めているのかという視点に立って、問い直されなければならない。そうした問い直しの契機を『雪中梅』は与えてくれるのだ。

5. 結び

本稿では、箱根という温泉場に注目して、『政治小説 雪中梅』が、「政治小説」と名乗りうる政治的な根拠を模索した。まず、才子佳人の通俗的展開を批判される『雪中梅』において、主人公国野基とヒロイン春の出会いの場となる「福住楼」について検討した。箱根は、開国以後外国人に注目されたことを契機に往來のルートが形成され、上層階級ばかりでなく、自由民権運動を推し進める志士たちとも関わりを持っていた。都市の階層性の影響を受けた箱根の温泉場のなかでも、湯本「福住楼」は、下層と上層の身分の者が同時に宿泊可能であり、内湯という共有空間において交錯する可能性を持つ場である。その場は、下層の男性主人公国野に、財を持つ上層の佳人と巡り合う偶然なる契機を齎すばかりでなく、上層のヒロイン春にとって下層であるために接近が許されない才子へと迫る絶好の機会を与えた。都市での無名性から解放され、佳人が政治的関与を実現する場でもあるのだ。「福住楼」に注目したとき、才子佳人の会合う温泉場は、生活空間が分断された都市の日常では不可能な出会いを実現させる政治的な空間として立ち上がってくる。

また、自由民権の志士との出会いと交流を描く温泉場は、自由民権後退期という同時代に接続された政治的空間であることをも指し示している。検閲などによって監視され、都市で落ち合い話し合うことが許されない状況を抱えながら、湯治療養という名目を掲げれば温泉場への旅行は可能となり、同志と宿を同じくし、隣り合わせて交流する機会にも恵まれる。他県の志士と談義を交わすことで、志を共有し連携を確認し合う場は、自由民権後退期の政治的雰囲気や蘇らせるものとなっている。そしてそれは、同時代に勃発した静岡事件との関与を彷彿とさせるように、同時代の政治的事件に根拠づけられたものであった。箱根の温泉場は、都市では分断される上層下層あるいは男女のコ

コミュニケーションと、自由民権の気運が失われつつある後退期の自由民権の志士同士のコミュニケーションを蘇らせる政治的な空間であったのだ。

このように同時代の政治的事象に接続し、同時代の新たな気運を内包するものとしてある箱根の温泉場は、『雪中梅』が取り込む「政治」の側面を浮き彫りにする一方で、「政治」の側面を解体する要素を持ちえたことをも解き明かす。初版から改版への改稿過程において、箱根の風呂場の場面は、間接的な場から、直接的な場へと書き換えられた。初版では、自由民権後退期の政治メディアの状況が映し出されていたのに対し、改版では、盗み聞きの手法を極め、内面描写を試みる場となる。この場は、先行研究において戯作的手法を踏襲して、稚拙な内面描写を伴うものと見做されてきた。しかし、この風呂場の変化は、「文学改良」の挫折を表象するばかりでなく、「文学改良」意識によって、同時代の政治的状况を反映するものとしての政治性が解体する状況を映し出す。内面描出の政治的資質を高く評価する立場、あるいは幕末から明治の歴史的転換を身に受ける作者の政治的資質を高く評価する立場において見落とされてきた政治的諸相を、『雪中梅』の温泉場のなかに読み解くことができる。

『雪中梅』は、箱根という舞台を用いて、自由民権後退期に都市では失われつつある政治的気運を蘇らせていた。作者の政治思想や同時代の思想史に裏づけられる政治的要素だけでなく、同時代の記憶が宿る空間の政治的な気運を取り込んだものだったのだ。また改稿が重ねられたことで、そこに備わる政治性が解体される過程をも浮き彫りにする。『雪中梅』は、これまでの「政治小説」に付与された解釈を刷新しうる契機を打ち出すものなのである。本稿では、『雪中梅』の箱根という舞台に注目して、「政治小説」に与えられてきた従来の読みを再検討したが、今後は、温泉という舞台から様々な日本近代文学を照射し直し、日本近代文学史の見直しを図りたい。

謝辞

本稿は、日本近代文学会 2019 年度春季大会（於専修大学）での口頭発表にもとづく。会場内外で貴重なご意見を下さった方々に感謝の意を申し上げる。

註

- 1 柳田泉『明治文学研究（政治小説研究 中巻）』9、春秋社、1968年
- 2 北村透谷は、多くの読者を獲得した『雪中梅』について、「空前の大著述と賞へられ」と評している（北村透谷「当世文学の潮模様」（『女学雑誌』1890年1月）『北村透谷選集』岩波書店、1970年）。
- 3 従来の「政治小説」研究においては、その出現に文学改良の役割を認めながら、「作品として

の裏りの薄さ」が指摘され、自由民権運動という政治と密接に関わることから、「政治小説」には「文学」の「自律性」がないとする立場が優勢だった。それに反論して、「政治小説」には特有の構造で存在しているのであり、「近代小説」と同じく自律した文学とする主張も登場したが、いずれにせよ、個々の作品内部の検討が疎かにされたまま「政治小説」という小説群が固定化されてきたといえる（中村光夫「ふたたび政治小説を」『中央公論』74（6）、中央公論新社、1959年5月、飛鳥井雅道「政治小説と『近代』」『思想の科学』6、中央公論社、1959年6月、越智治雄「政治小説と草双紙」東京大学国語国文学会編『国語と国文学』32（10）、明治書院、1955年10月、松井幸子『政治小説の論』桜楓社、1979年、平岡敏夫『日本近代文学の発端』塙書房、1992年（1973年の再刊）、「政治小説の問題」『シンポジウム日本文学12 近代文学の成立期』学生社、1977年）。近年、政治小説研究においても既存の解釈の再検討が少ないながらも試みられており、さらなる具体的検討が必要である（山本良『小説の維新史——小説はいかに明治維新を生き延びたか』風間書房、2005年、高橋修「冒険小説の政治学——『報知異聞 浮城物語』の世界像」小森陽一ほか編『岩波講座文学10 政治への挑戦』岩波書店、2003年10月、西田谷洋『政治小説の形成——始まりの近代とその表現思想』世織書房、2010年）。また、「政治」と「文学」の関係について、柄谷行人や木村洋も言及している（柄谷行人『定本 日本近代文学の起源』岩波書店、2011年、木村洋『文学熱の時代——慷慨から煩悶へ』名古屋大学出版会、2015年）。

- 4 柳田は、上篇第二回井生村楼と下篇第二回「梅屋」の国野の演説を、鉄腸が行った同意趣の演説（1886（明治19）年3月23-25日、7月14-16日「朝野新聞」に掲載）を反復するものであるとしている。そして、「無産者」は「有産者との結合を得て、始めてその志を成し遂げるに至る」という鉄腸の政治思想が示されたのが本作だとしている（柳田、前掲書）。
- 5 前田は、政治的「現場」の模写はされるものの、「皮相」とどまり、政治の実相を再現していないという坪内逍遙の評価（「雪中梅の批評」『学芸雑誌』1886（明治19）年10月）の立場を援用する（前田愛「明治歴史文学の原像——政治小説の場合」『近代日本の文学空間』平凡社、2004年）。
- 6 また、前田は、「政治小説」や「政治」に向けられたリビドーがその対象を失って内向した結果、明治20年代に「立身出世」小説が一つの「サイクル」を終えたとし、明治初期から青年たちの間に浸透していた「立身出世」思想の挫折を読み解いている（前田愛「明治立身出世主義の系譜」『近代読者の成立』有精堂出版、1973年）。
- 7 西田谷洋は、「明治初期政治小説とカテゴリー化される民権小説」が、「政治小説」という名のもとに一つの制度として括られる」過程を読み解き、近代文学史の定説を批判的に乗り越えようとしている（西田谷、前掲書）。
- 8 「近来流行の政治小説を評す」（『国民之友』（6）、民友社、1887年7月）川副国基編『日本近

代文学大系』57、角川書店、1972年

- 9 柳田、前掲書
- 10 柳田、前掲書
- 11 国野が訪れた旅館は箱根湯本の「福住楼」であり、実在する旅館であった。1885（明治18）年の春から糖尿病を患い、7月14日から9月4日まで箱根に滞在して最も多くを「福住楼」で過ごした。また、朝野新聞では1886（明治19）年7月15日に鉄腸の箱根行きを報じている（末広鉄腸「雪中梅」『日本近代文学大系 明治政治小説集』2、角川書店、1974年）。
- 12 以後、特に断りない限り、本文は末広鉄腸『雪中梅』（博文堂、1886年）から引用し、旧字は新字に改める。尚、改版については末広鉄腸『雪中梅』（嵩山堂、1890年）を引用する。
- 13 東京都編『都史紀要 4 築地居留地』東京都、1957年
- 14 橋爪貫一編『箱根熱海温泉道案内』（橋爪貫一、1877年）は、交通手段や、湯宿の情報を記載した当時の旅行案内誌である。「内湯」という情報が示されると共に、本作に登場する「福住楼」は「第一等」、「梅屋」は「第五等」、「亀屋」は「第一等」と紹介されている。「福住楼」には、「客の待遇尤も懇切」で「浴客常に絶るの日なし」と記されている。
- 15 青春期を二宮尊徳の弟子として過ごした正兄は報徳仕法を役立て、箱根温泉の再建と近代化に努め、外部に幅広いネットワークを持っていた（武田尚子・文貞實『温泉リゾート・スタディーズ——箱根・熱海の癒し空間とサービスワーク』青弓社、2010年）。
- 16 武田尚子・文貞實、前掲書
- 17 柳田、前掲書
- 18 沼謙吉『武相近代史論集』揺籃社、2013年
- 19 春が築地から箱根へと辿り着いた経路は、外国人や政府高官といった富裕層の訪れる経路に重なり合う。幕末に結ばれた条約では、開港場から外国人が自由に闊歩できる区域が決められた。この外国人遊歩規定は、居留区から約10里四方とされ、当初その境は、北は六郷川、多摩川、西側は酒匂川であり、健康のための遠出や観光だけでなく、商売にも利用された。内地旅行の規則が緩和され、研究、養生の目的での旅行が許されるようになると、許可証が交付された横浜居留区の外国人によって、箱根は高原避暑地として利用されるようになった（齊藤功「わが国最初の高原避暑地宮ノ下と箱根——明治期を中心に」『筑波大学人文地理学研究』（18）、筑波大学地球科学系、1994年3月）。
- 20 1886（明治19）年に始まった道路開削は、翌年末には完成した（箱根温泉旅館協同組合『箱根温泉史』ぎょうせい、1986年）。湯本-小田原間の開削された新しい道中が映し出されない一方で、塔ノ沢から春に出会う茶屋に至る道中では、「七曲と呼ぶ峻坂」や、「山高くして谷深く樹木鬱蒼」とした様子が描写される。後者には、断崖を切り崩す工事以前の、急峻な早川溪谷の壮大な自然の様相が留められている。

- 21 本作の温泉場で登場人物たちは、徒歩あるいは山駕籠という手段で移動している。湯本-小田原間の車道開削工事は、五カ年の計画で1875（明治8）年7月18日から開始され、1880（明治13）年9月に完成し人力車が通るようになっているが、国野が春を追いかけて行く道筋（湯本-塔ノ沢-宮ノ下間）の工事開始は、1879（明治12）年（湯本-塔ノ沢間）と、1886（明治19）年11月（塔ノ沢-宮ノ下間）であり、完成は作品発表の後である（箱根温泉旅館協同組合、前掲書）。発表後、1887（明治20）年には東海道線が横浜から国府津に延長、同年末に塔ノ沢-宮ノ下間車道開通、さらに1888（明治21）年には国府津-湯本間に馬車鉄道が通じ、翌年東海道線の新橋-神戸間が全通している。東海道線全通は上方からの客の流れを齎した（箱根町立郷土資料館編『箱根彩景』夢工房、2000年）。
- 22 徳富蘇峰は、『国民之友』誌上で、東京中心主義からの脱皮と地方文化の復興を訴える田舎紳士論を説いて、地方変容を危惧していた（徳富蘇峰「隠密なる政治上の変遷（二、田舎紳士）」『国民之友』（16）、民友社、1888年2月、前田愛、加藤秀俊『明治メディア考』中央公論社、1983年）。
- 23 手塚豊「自由党静岡事件裁判小考」『法学研究——法律・政治・社会』40（5）、慶應義塾大学法学研究会、1967年5月
- 24 「其嫌疑の原因如き、或は国事に関するの犯罪なるか、或は通例の刑事に関するの犯罪なるか固より知るべからずと雖も、欺くも数多の党员並に其関係者が続々拘引させらるゝを觀れば、通例の刑事に関するの罪犯には非らずして恐くは国事に関するの拘引なるべしと想像せらるゝなり」（静岡大務新聞社「静岡大務新聞」1886年6月16日）
- 25 静岡事件は、東京横浜毎日（6月18日）、東京日日（6月22日）、読売（6月16日）、朝日（6月18日）新聞各紙でも取り上げられ、それ以降8月頃まで紙上を賑わせている。
- 26 手塚豊、寺崎修「自由党静岡事件に関する新資料——鈴木音高外八名国事二関スル供述書」『法学研究——法律・政治・社会』55（2）、慶應義塾大学法学研究会、1982年2月、手塚豊、寺崎修「自由党静岡事件の新資料二篇」『法学研究——法律・政治・社会』55（9）、慶應義塾大学法学研究会、1982年9月
- 27 鉄腸は1875（明治8）年、1876（明治9）年に拘引経験があり、1885（明治18）年6月には知人馬場辰猪が爆弾購入嫌疑で拘引されている（柳田、前掲書、前掲「政治小説の問題」）。
- 28 加波山事件では、栃木県庁落成の際を狙って県令三島通庸及び政府官僚を暗殺する計画を立て、爆弾が独自に開発されていた（木村哲人『テロ爆弾の系譜』第三書館、2005年）。そうした自由党激派が爆薬を製造する加波山事件と「人民の意志」党がダイナマイトを製造し、アレクサンドル二世の暗殺を企て決行する宮崎夢柳『鬼啾啾』は、同時性を持っていた。前田は、『雪中梅』の爆発物には、過激派の起こした加波山事件の記憶を鎮魂した『鬼啾啾』を揶揄あるいは侮辱する鉄腸の意図が込められていたとする（前田、前掲「明治歴史文学の原像——

政治小説の場合」、前掲「政治小説の問題」)。

- 29 前掲「政治小説の問題」
- 30 明治の初期から中期にかけて新聞は、知識人層を対象に政論を取り扱う「大新聞」、庶民に向けて娯楽記事を提供する「小新聞」に大きく二分されていた。
- 31 前田、前掲『近代読者の成立』
- 32 山本武利『近代日本の新聞読者層』法政大学出版局、1981年、小森陽一「近代読者論」井上俊ほか編『岩波講座現代社会学8 文学と芸術の社会学』岩波書店、1996年
- 33 下篇第六回は、箱根から帰京した国野が、春の叔父と手を組んで国野と春の関係を壊そうと企む竹村と松田に呼び出された場面となっている。そこでは、温泉場で国野を帰京に導かせた記事が再び取り上げられ、次第に「何となく不快」になっていく国野の様子が描かれている。
- 34 内海文三を主人公とする『浮雲』は、文三の内的独白を露呈させながら、語り手が文三を批判的に対象化していく手法を打ち出した。「人情」を外側から「観察」するだけでなく、その内側を「解剖」するものと見做され、「近日の小説世界」において「一種飛びぬけたもの」(大江逸(徳富蘇峰)「浮雲(二篇)の漫評」『国民之友』(16)、民友社、1888年2月)というように、高く評価されることとなった。
- 35 『浮雲』は、文三の内的独白と共に、地の文における、文三の内的意識を代弁する語りと、心的動揺を外側から描写する語りとが入り組んで構成されている。小森陽一は、『浮雲』の作品世界に内在し、三人称で文三を捉える語り手が、文三の内的独白を批判的に相対化し、一面性を暴く機能を持っていたと指摘した(小森陽一『文体としての物語』青弓社、2012年)。
- 36 盗み聞きは、滝沢馬琴「稗史七則」のなかでは、「偷聞(たちきゝ)」として提示されている。そこでは「省筆」の方法の一つとして、甲と乙の間で交わされる会話の内容を、事後に必ず知らねばならない丙があった場合、甲なり乙なり地の文なりを介し改めて丙に伝達するという重複を避けるため、甲乙の会話を直接丙に共有させる手法と説明されていた(渡部直己『日本小説技術史』新潮社、2012年)。
- 37 坪内逍遙は、『小説神髓』(1885-1886(明治18-19)年)において小説における内面提示を強調したあと、その実践の一つとして、『妹と背鏡』を発表した。
- 38 石橋忍月は「立聞は一種の省略法」で「誠に便利」だが、「此の如く屢々用ゐられては」、「直に目に遮わり何んとかく残念の心地ぞする」として、『妹と背鏡』で盗み聞きが不自然に多用されていることを指摘した(「妹と背鏡を読む」(1887年)『明治文学全集』23、筑摩書房、1971年)。
- 39 前田、前掲『近代読者の成立』
- 40 木村、前掲『文学熱の時代——慷慨から煩悶へ』名古屋大学出版会、2015年